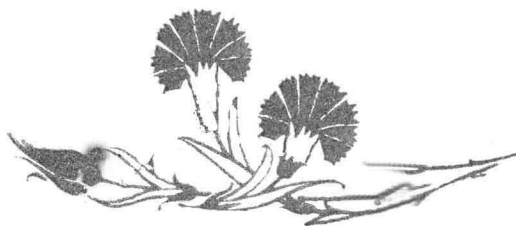


集郎一潤崎谷

集全作名豪文代現



房書出河

谷崎潤一郎集

現代文豪名作全集 第二回配本

昭和二十八年三月二十日 初版印刷
昭和二十八年三月二十五日 初版發行

定價 二八〇圓
地方定價 二九〇圓

著者 谷崎潤一郎

編集者 伊藤 整

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出 孝雄

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五
山田 一雄

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

電話神田(25)三一七四番

精興社印刷・岸田製本

目次

刺青	三
少年	九
小さな王國	三
母を戀ふる記	五三
鮫人	七〇
不幸な母の話	一七九
私	一九八
蓼喰ふ蟲	二〇九

盲目物語……………三三

蘆刈……………三七六

春琴抄……………四〇八

磯田多佳女のこと……………四四六

年譜……………四六七

解説……………伊藤整

谷崎潤一郎集

刺し

青^{せい}

青 刺

其れはまだ人々が「愚」と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬやうに、御殿女中や華魁の笑ひの種が盡きぬやうにと、饒舌を賣るお茶坊主だの幫間だのと云ふ職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であつた。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——當時の芝居でも草雙紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も擧つて美しからむと努めた揚句は、天稟の體へ繪の具を注ぎ込む迄になつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍つた。

馬道を通ふお客は、見事な刺青のある駕籠舁を選んで乗つた。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨をした。時時兩國で催される刺青會では參會者おの／＼肌を叩いて、互に奇抜な意匠を誇り合ひ、評しあつた。

清吉と云ふ若い刺青師の腕きゝがあつた。淺草のちやり

文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であるとして囃されて、何十人の人の肌は、彼の繪筆の下に統地となつて擴げられた。刺青會で好評を博す刺青の多くは彼の手になつたものであつた。達磨金ほかし刺が得意と云はれ、唐草權太は朱刺の名手と讃へられ、清吉は又奇警な構圖と妖艶な線とで名を知られた。

もと豊國國貞の風を慕つて、浮世繪師の渡世をして居たゞけに、刺青師に墮落してからの清吉にもさすが畫工らしい良心と、銳感とが残つて居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購ふ譯には行かなかつた。たま／＼描いて貰へるとしても、一切の構圖と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪へ難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらへねばならなかつた。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、眞紅に血を含んで脹れ上る肉の疼きに堪へかねて、大抵の男は苦しき呻き聲を發したが、其の呻きごゑが激しければ激しい程、彼は不思議に云ひ難き愉快を感じるのであつた。刺青のうちでも殊に痛いと云はれる朱刺、ぼかしぼり、——それを用ふる事は彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする爲め湯へ浴つて出て來る人は、皆半死半生の體で清吉の足下に打ち倒れたまゝ、暫くは身動きさへも出来なかつた。その無殘な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「無お痛みでがせうなあ」

と云ひながら、快さうに笑つて居る。

意氣地のない男などが、まるで致死期の苦しみのやうに口を歪め齒を喰ひしぱり、ひい／＼と悲鳴をあげる事があると、彼は、

「お前さんも江戸つ兒だ。辛抱しなさい。——この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

かう云つて、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまはず刺つて行つた。また我慢つよい者がグツと膽を据ゑて、眉一つしかめず泳えて居ると、

「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ笑つ張者だ。」

だが見なさい、今にそろ／＼疼き出して、どうにもかうにもたまらないやうにならうから」と白い齒を見せて笑つた。

彼の年來の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であつた。その女の素質と容貌とに就いては、いろ／＼の注文があつた。啻に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足する事が出来なかつた。江戸中の色町に名を響かせた女と云ふ女を調べても、彼の氣分に適つた味はひと調子とは容易に見つからなかつた。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながらも、彼はなほ其の願ひを捨てずに居た。

丁度四年目の夏のとあるゆふべ、深川の料理屋平清の前を

通りかゝつた時、彼はふと門口に待つて居る駕籠の簾のかげから眞つ白な女の素足のこぼれて居るのに氣がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じやうに複雑な表情を持つて映つた。その女の足は、彼に取つては貴き肉の寶玉であつた。拇指から起つて小指に終る繊細な五本の指の整ひ方、繪の島海邊で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合ひ、珠のやうな踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤澤。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であつた。この足を持つ女こそは、彼が永年たづねあぐんだ、女の中の女であらうと思はれた。清吉は躍りたつ胸をおさへて、其の人の顔が見たさに駕籠の後を追ひかけたが、二三町行くと、もう其の影は見えなかつた。

清吉の憧れごゝちが、激しき戀に變つて其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であつた。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくはへながら、錆竹の濡れ縁に萬年青の鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪ふけはひがして、袖垣のかげから、つひぞ見馴れぬ小娘が這入つて來た。それは清吉が馴染の辰巳の藝妓から寄せられた使者であつた。

「姐さんから此の羽織を親方へお手渡しして、何か裏地へ繪模様を畫いて下さるやうにお頼み申せて……」

と、娘は鬱金の風呂敷をほどいて、中から岩井杜若の似顔畫のたたうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出し

た。

其の手紙には羽織のことをくれぐれも頼んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私の事も忘れずにこの娘も引き立てゝやつて下さいと認めてあつた。

「どうも見覚えのない顔だと思つたが、それぢやお前は此の頃此方へ來なすつたのか」

かう云つて清吉は、しげ／＼娘の姿を見守つた。年頃は漸う十六か七かと思はれたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のやうに物凄く整つて居た。それは國中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代つた、め麗しい多くの男女の、夢の數々から生れ出づべき器量であつた。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で歸つたことがあらうがな」

かう訊ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備後表の臺に乗つた巧緻な素足を仔細に眺めた。

「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたび／＼まみりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑つて答へた。

「丁度これで足かけ五年、己はお前を待つて居た。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。——お前に見せてやりたいものがあるから、上つてゆつくり遊んで行くがいゝ」

と、清吉は暇を告げて歸らうとする娘の手を取つて、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先づ其の一つを娘の前に繰り展げた。

それは古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた繪であつた。瑠璃珊瑚を鑲めた金冠の重さに得堪へぬなやかな體を、ぐつたり勾欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがへし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云ひ、鐵の鎖で四肢を銅柱へ縛ひつけられ、最後の運命を待ち構へつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉ぢた男の顔色と云ひ、物凄みに巧に描かれて居た。

娘は暫くこの奇怪な繪の面を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫へた。怪しくも其の顔はだんだんと妃の顔に似通つて來た。娘は其處に隠れたる眞の「己」を見出した。

「この繪にはお前の心が映つて居るぞ」
かう云つて、清吉は快げに笑ひながら、娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪めた額を擡げて云つた。

「この繪の女はお前なのだ。この女の血がお前の體に交つて居る筈だ」

と、彼は更に他の一本の畫幅を展げた。

それは「肥料」と云ふ畫題であつた。畫面の中央に、若い女が櫻の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身邊を舞ひつゝ凱歌をうたふ小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑へ難き誇りと歡びの色。それは戰の跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んで居た何物かを、探りあてたる心地であつた。

「これはお前の未來を繪に現はしたのだ。此處に斃れて居る人達は、皆これからお前の爲めに命を捨ててゐるのだ」かう云つて、清吉は娘の顔と寸分違はぬ畫面の女を指さした。

「後生だから、早く其の繪をしまつて下さい」と、娘は誘惑を避けるが如く、畫面に背いて疊の上へ突俯したが、やがて再び唇をわななかした。

「親方、白狀します。私はお前さんのお察し通り、其の繪の女のやうな性分を持つて居ますのさ。——だからもう堪忍して、其れを引つ込めてお呉んなさい」

「そんな卑怯なことを云はずと、もつとよく此の繪を見るがいい。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだらうよ」かう云つた清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑ひが漂つて居た。

然し娘の頭は容易に上らなかつた。襦袢の袖に顔を蔽うていつまでも突俯したまゝ、

「親方、どうか私を歸しておくれ。お前さんの側に居るの

は恐ろしいから」と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」

と云ひながら清吉は何氣なく娘の側に近寄つた。彼の懷には嘗て和蘭醫から貰つた麻睡劑の壺が忍ばせてあつた。

日はうらゝかに川面を射て、八疊の座敷は燃えるやうに照つた。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顔や、障子の紙に金色の波紋を描いてふるへて居た。部室のしきりを閉て切つて刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚としてすわつて居るばかりであつた。彼は今始めて女の妙相をしみじみと味はふ事が出來た。その動かぬ顔に相對して、十年百年この一室に靜坐するともなほ飽くことを知るまいと思はれた。古のメムフィスの民が、莊嚴なる埃及の天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾つたやうに、清吉は清淨な人間の皮膚を、自分の戀で彩らうとするのであつた。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ繪筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。若い刺青師の靈は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲むだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたたりであつた。彼は其處に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝつた

が、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかつた。娘の歸りの遅きを案じて迎ひに出た箱屋迄が、

「あの娘ならもう疾うに歸つて行きましたよ」

と云はれて追ひ返された。月が對岸の土州屋敷の上にかゝつて、夢のやうな光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てゝ居た。

一點の色を注ぎ込むのも、彼に取つては容易な業でなかつた。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるやうに感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具へ始めて、再び夜がしら／＼と白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蠕つた。

春の夜は、上り下りの河船の櫓聲に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、靈岸島の家々の薨がきらめく頃、清吉は漸く繪筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。その仕事をなし終へた後の彼の心は空虚であつた。

二つの人影は其のまゝ稍々暫く動かなくなつた。さうして、低く、かすれた聲が部室の四壁にふるへて聞えた。

「己はお前をほんたうの美しい女にする爲めに、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本國中に、お前に優る女は居ない。お前はもう今迄のやうな臆病な心は

持つて居ないのだ。男と云ふ男は、皆なお前の肥料になるのだ。……」

其の言葉が通じたか、かすかに、糸のやうな呻き聲が女の唇にのぼつた。娘は次第々々に知覺を恢復して來た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しからう。體を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」

かう云はれて娘は細く無意味な眼を開いた。其の瞳は夕月の光を増すやうに、だん／＼と輝いて男の顔に照つた。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰つた代りに、私は嘸美しくなつたらうねえ」

娘の言葉は夢のやうであつたが、しかし其の調子には何處か鋭い力がこもつて居た。

「まあ、これから湯殿へ行つて色上げをするのだ。苦しくらうがちツと我慢をしな」

と、清吉は耳元へ口を寄せて、勞はるやうに囁いた。

「美しくさへなるのなら、どんなにでも辛抱して見せませうよ」

と、娘は身内の痛みを抑へて、強ひて微笑んだ。

「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨つて、二階へ行つて待つて居てお呉れ、私はこ

んな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」

娘は湯上りの體を拭ひもあへず、いたはる清吉の手をつき

のけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、壓おさされる如くに呻いた。氣狂じみた髪が惱ましげに其の頬へ亂れた。女の背後には鏡臺が立てかけてあつた。眞つ白な足の裏が二つ、その面へ映つて居る。

昨日とは打つて變つた女の態度に、清吉は一と方ならず驚いたが、云はれるまゝに獨り二階に待つて居ると、凡そ半時ばかり經つて、女は洗ひ髪を兩肩へすべらせ、身じまひを整へて上つて來た。さうして苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな眉を張つて、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。

「この繪は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持つてもう歸るがいゝ」

かう云つて清吉は卷物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨ててしまひました。——お前さんは眞先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は劍のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の聲がひびいて居た。

「歸る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はかう云つた。

女は黙つて領いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

少年

もう彼れ此れ二十年ばかりも前にならう。漸く私が十ぐらゐで、蠣殻町二丁目の家から水天宮裏の有馬學校へ通つて居た時分——人形町通りの空が霞んで、軒並の商家の紺暖簾にぼか／＼と日があたつて、取り止めのない夢のやうな幼心にも何となく春が感じられる陽氣な時候の頃であつた。

或るうら／＼と晴れた日の事、眠くなるやうな午後の授業が済んで墨だらけの手に算盤を抱へながら學校の門を出ようとする、

「萩原の榮ちゃん」

と、私の名を呼んで後からばた／＼と追ひかけて來た者がある。其の子は同級の塙信一と云つて入學した當時から尋常四年の今日まで附添人の女中を片時も側から離した事のない評判の意氣地なし、誰も彼も弱虫だの泣き虫だのと惡口をきいて遊び相手になる者のない坊ちやんであつた。

「何か用かい」

珍らしくも信一から聲をかけられたのを不思議に思つて私

は其の子と附添の女中の顔をしげ／＼と見守つた。

「今日あたしの家へ來て一緒にお遊びな。家のお庭でお稻荷様のお祭があるんだから」

緋の打ち紐で括つたやうな口から、優しい、おづ／＼した聲で云つて、信一は訴へるやうな眼差をした。いつも一人ぼ／＼でいぢけて居る子が、何でこんな意外な事を云ふのやら、私は少しうろたへて、相手の顔を讀むやうにぼんやり立つた儘であつたが、日頃は弱虫だの何だのと惡口を云つていぢめ散らしたやうなものゝ、かういつて眼の前に置いて見ると、有繫良家の子息だけに氣高く美しい所があるやうに思はれた。糸織の筒袖に博多の献上の帶を締め、黄八丈の羽織を着てきやら、この白足袋に雪駄を穿いた様子が、色の白い瓜實顔の面立とよく似合つて、今更品位に打たれたやうに、私はうつとりして了つた。

「ねえ、萩原の坊ちやん、家の坊ちやんと御一緒にお遊びなさいましな。實は今日手前共にお祭がございましてね、あの成る可く大人しいお可愛らしいお友達を誘つてお連れ申すやうにお母様のお云ひ附けがあつたものですから、それで坊ちやんがあなたをお誘ひなさるのでございますよ。ね、いらしつて下さいましな。それともお嫌でございますか」

附添の女中にかう云はれて、私は心中得意になつたが、「そんなら一旦家へ歸つて、斷つてから遊びに行かう」と、わざと殊勝らしい答をした。

「おやさうでございましたね。ではあなたのお家までお供して参つて、お母様に私からお願ひ致しますか、さうして手前共へ御一緒に参りませう」

「うん、いゝよ。お前ン所は知つて居るから後から一人でも行けるよ」

「さうでございますか。それではきつとお待ち申しますよ。お歸りには私がお宅までお送り申しますから、お心配なさらないやうにお家へ斷つていらつしやいまし」

「あゝ、それぢや左様なら」

かう云つて、私は子供の方を向いてなつかしさうに挨拶をしたが、信一は例の品のある顔をにこりともしせず、唯鷹揚にうなづいたゞけであつた。

今日からあの立派な子供と仲好しになるのかと思ふと、何となく嬉しい氣持がして、日頃遊び仲間の鬚屋かみどやの幸吉や船頭の鐵公などに見付からぬやうに急いで家へ歸り、盲縞の學校着を對の黄八丈の不斷着に着更へるや否や、

「お母さん、遊びに行つて来るよ」

と、雪駄をつツかけながら格子先に云ひ捨てゝ、其の儘塙の家へ駈け出して行つた。

有馬學校の前から眞つ直ぐに中之橋を越え、濱町の岡田の堀へついて中洲に近い河岸通りへ出た所は、何となくさびれたやうな閑靜な一廓をなして居る。今はなくなつたが新大橋の袂から少し手前の右側に名代の團子屋と煎餅屋があつて、其のすぢ向うの角の、長い／＼堀を繞らした嚴めし

い鐵格子の門が塙の家であつた。前を通るとこんもりした邸内の植込みの青葉の隙から破風型の日本館の瓦が銀鼠色に輝き、其のうしろに西洋館の褪紅緋色の煉瓦がちら／＼見えて、いかにも物持の住むらしい、奥床しい構へであつた。

成る程其の日は何か内にお祭でもあるらしく、陽氣な馬鹿囃しの太鼓の音が塙の外に洩れ、開け放された横町の裏木戸からは此の界限に住む貧乏人の子供達が多勢ぞろ／＼庭内に這入つて行く。私は表門の番人の部屋へ行つて信一を呼んで貰はうかと思つたが、何となく恐ろしい氣がしたので、其の子供達と同じやうに裏木戸の潜りを抜けて構への中へ這入つた。

何と云ふ大きな屋敷だらう。かう思つて私は瓢箪形をした池の汀の芝生にイんでひろい／＼庭の中を見廻した。周延が描いた千代田の大奥と云ふ三枚續きの繪にあるやうな遣り水、築山、雪見燈籠、瀬戸物の鶴、洗ひ石などがお詠ひ向きに配置されて、一つの大きな伽藍石から小さい飛び石が幾個も／＼長く續き、遙か向うに御殿のやうな座敷が見えてゐる。彼處に信一が居るのかと思ふと、もうとても今日は會へないやうな氣がした。

多勢の子供達は毛氈のやうな青草の上を蹈んで、のどかな暖かい日の下に遊んで居る。見ると綺麗に飾られた庭の片隅の稻荷の祠から裏の木戸口まで一間置き位に地口の行燈が並び、接待の甘酒だのおでんだの汁粉だのゝ屋臺が處々

に設けられて、餘興のお神樂や子供角力のまはりには眞つ黒に人が集まつてゐる。折角樂しみにして遊びに來たかひもなく、何だかがつかりして私はあてどもなく、其處らを歩き廻つた。

「兄さん、さあ甘酒を飲んでおいで、お錢は要らないんだよ」

甘酒屋の前へ來ると赤い襷をかけた女中が笑ひながら聲をかけたが、私はむづかしい顔をして其處を通り過ぎた。やがておでん屋の前へ來ると、また、

「兄さん、さあおでんを喰べておいで、お錢がなくなつても上げるんだよ」

と、頭の禿げた爺に聲をかけられる。

「いらないよ、いらないよ」

と、私は情ない聲を出して、あきらめたやうに裏木戸へ引き返さうとした時、紺の法被を着た酒臭い息の男が何處からかやつて來て、

「兄さん、お前はまだお菓子を貰はねえんだらう。けへるんならお菓子を貰つてけへりな。さ、此れを持つて彼處の御座敷の小母さんの處へ行くとお菓子をくれるから、早く貰つて來るがい」

かう云つて眞紅に染めたお菓子の切符を渡してくれた。私は悲しさが胸にこみ上げて來たが、若しや座敷の方へ行つたら信一に會へるか知らんと思ひ、云はれる儘に切符を貰つて又庭の中を歩き出した。

幸ひと其れから間もなく附添の女中に見附けられて、

「坊ちゃん、よくいらしつて下さいました。もう先からお待ち兼ねでございますよ。さあ彼方へいらつしやいまし。かう云ふ卑しい子供達の中でお遊びになつてはいけません」

と、親切に手を握られ、私は思はず涙ぐんで直ぐには返事が出來なかつた。

床の高い、子供の丈ぐらゐ有りさうな縁に沿つて、庭に突き出た廣い座敷の蔭へ廻ると、十坪ばかりの中庭に、萩の袖垣を結び繞らした小座敷の前へ出た。

「坊ちゃん、お友達がいraftしやいましたよ」

青桐の木立の下から女中が呼び立てると、障子の蔭にばたばたと小刻みの足音がして、

「此方へお上がん」

と甲高い聲で怒鳴りながら、信一が縁側へ駈けて來た。あの臆病な子が、何處を押せばこんな元氣の好い聲が出るのだらうと、私は不思議に思ひながら、見違へる程盛裝した友の様子をまぶしさうに見上げた。黒羽二重の股斗目の紋

附に羽織袴を着けて立つた姿は、縁側一杯に照らす麗かな日をまともに浴びて黒い七子の羽織地が銀沙のやうにきらきら光つて居る。

友達に手をひかれて通されたのは八疊ばかりの小綺麗な座敷で、餅菓子の折の底を嗅ぐやうな甘い香りが部屋の中に漂ひ、ふくよかな八反の座布團が二つ人待ち顔に敷かれて

あつた。直ぐにお茶だのお菓子だのお強飯に口取りを添へた溜塗の高臺だのが運ばれて、

「坊ちゃん、お母様がお友達と仲よくこれを召し上げるやうにつて。……それから今日は好いお召を召していらつしやるんですから、あんまりお徒をなさらないやうに大人しくお遊びなさいましよ」

と、女中は遠慮してゐる私に強飯やきんとんを進めて次へ退つて了つた。

物靜かな、日あたりの好い部屋である。燃えるやうな障子の紙に縁先の紅梅の影が映つて、遙かに庭の方から、てん、てん、てん、とお神樂の太鼓の音が子供達のガヤガヤ云ふ騒ぎに交つて響いて来る。私は遠い不思議な國に來たやうな氣がした。

「信ちやん、お前はいつも此のお座敷にゐるのかい」

「うゝん。此處は本當は姉さんの所なの。彼處にいろんな面白い姉さんの玩具があるから見せて上げようか」

かう云つて信一は地袋の中から、奈良人形の狸々や、極込細工の尉と姥や、西京の芥子人形、伏見人形、伊豆藏人形などを二人のまはりへ綺麗に列べ、さまゝの男女の姿をした首人形を二疊程の疊の目へ數知れず挿し込んで見せた。二人は布團へ腹這ひになつて、髻を生やしたり、眼をむきだしたりして居る巧緻な人形の表情を覗き込むやうにした。さうしてかう云ふ小さな人間の住む世界を想像した。

「まだこゝに繪雙紙が澤山あるんだよ」

と、信一は又袋戸棚から、半四郎や菊之丞の似顔繪のたうに一杯詰まつて居る草雙紙を引き擦り出して、色々の繪本を見せてくれた。何十年立つたか判らぬ木版刷の極彩色が、光澤も褪せないで鮮やかに匂つてゐる美濃紙の表紙を開くと、微臭いケバケバの立つて居る紙の面に、舊幕時代の美しい男女の姿が生き／＼とした目鼻立ちから細かい手足の指先まで、動き出すやうに描かれてゐる。丁度此の屋敷のやうな御殿の奥庭で、多勢の腰元と一緒にお姫様が螢を追つて居るかと思へば、淋しい橋の袂で深編笠の侍が下部の首を打ち落し、死骸の懷中から奪ひ取つた文箱の手紙を、月にかざして讀んで居る。其の次には黒装束に覆面の曲者がお局の中へ忍び込んで、ぐつすり寝て居る椎茸鬘の女の喉元へ布團の上から刀を突き通して居る。又ある所では行燈の火影がすかな一と間の中に、濃艶な寢間着姿の女が血のしたゝゝる剃刀を口に咬へ、虚空を掴んで足許に斃れて居る男の死に態をじろりと眺めて、「さまを見やがれ」と云ひながら立つて居る。信一も私も一番面白がつて見たのは奇怪な殺人の光景で、眼球が飛び出して居る死人の顔だの、胴斬りにされて腰から下だけで立つて居る人間だの、眞つ黒な血痕が雲のやうに斑をなして居る不思議な圖面を、夢中になつて覗き込んで居ると、

「あれ、また信ちやんは人の物を徒らして居るんだね」
かう云つて、友禪の振袖を着た十三四の女の子が襖を開け